

時代の寵児と持て囃され、世界一になると豪語し、プロ野球球団やマスコミの買収劇、果ては、衆議院選挙にも無所属ながら公認に近い形で出馬して日本のみならず世界の話題を独り占めにした感のあるライブドアのホリエモンこと堀江氏を始めとする役員が東京地検特捜部に、「風説の流布」「偽計取引」の容疑で逮捕された。事情聴取からの直の逮捕劇であり、これも異例である。



さて、新聞・テレビ等のマスコミは朝から夕までライブドア事件一色である。「時代の寵児」「大胆な若き経営者」「新ビジネスの旗手」「ネット界の寵児」「IT業界の大君」「時代の顔」「IT長者」「IT寵児」「旧体制の破壊者」「挑戦者」「風雲児」「時代の申し子」「新しい時代の息吹」「立志伝中の人物」「構造改革の若き旗手」等々転落するまで、マスコミも自民党を始めとする政治家（私の息子とまで言い切った某も居たが・・・）も国民一般も良くも持ち上げたものである。意地悪い言い方でも「拝金主義者」「勝ち組」「脱法だとしても合法」「人生ゲームの勝利者」「現代の錬金術師」「票寄せパンダ」等と評していた。

然し、逮捕直後から彼に捧げられたこれ等の賛辞が一転した。曰く「倫理なきIT寵児」「虚業の仮面剥奪」「倫理観、道徳観の欠如」「驕り」「軽薄な時代の風潮」「偶像転落」「犯罪のデパート」「欠落していた顧客主義」「ヒルズ族の光と影」「（ホリエモン）帝国の崩壊」「マネーゲームの成れの果て」「実業ではなく虚業」「マネー至上主義」等々、これからも新しい言葉が生まれてくるのではないだろうか。

所感を幾つか。

① 「打落水狗」溺れた犬をそこまで叩くか？

某国には、溺れた犬は徹底的に叩いて、二度と立ち上がれないようにすべきであるとの箴言がある。今正に日本は朝野を挙げてその感無きにしも非ずだ。確かにライブドア事件の真相解明と再発防止策は講じられなければならないが、堀江氏の功の部分をも忘れてはなるまい。そこまでする必要があるのかという位に、掌を返してのバッシングは頂けない。余りにも無節操ではないか。どうも持て囃した輩ほど叩き方が強いのではないかと思われる。もう少し、冷静になるべきではないだろうか。

[参考：「打落水狗」水に落ちた狗（いぬ）は打つべし、「阿Q正伝」の著者として名高いあの魯迅の言葉である。細部の出典は不明]

② 日本全体の倫理観の欠如！

今回はライブドア1社の個別的問題であるが、昨今企業倫理が問われる不祥事が多発している。日本人が本来持っていた倫理観や道徳観が希薄化し、或いは、功なり名を遂げた者達の人間としての未熟さ故の所業の数々、欧米で言うところの「ノーブレス・オブリージュ」が喪失してしまったのではないだろうか。何故日本人は、こうなってしまったのだろうか。日本の再生は「心の再生」からである。与えられた枠の中で正々堂々と勝負することを美学とする武士道的精神は失われてしまったのであろうか。社会の木鐸として国民を教導すべき政治家がそんなのだから、国民一般を責める訳にもいかないのだろう。

[参考：ノーブレス・オブリージュ：身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務があるという、欧米社会における基本的な道徳観。高い地位や身分に伴う義務。ヨーロッパ社会で、貴族など高い身分の者にはそれに相応した重い責任・義務があるとする考え方。]

③ 金融庁・証券取引等監視委員会の機能不全！

ライブドアの錬金術(?)の手法については厳しく糾弾されねばならないとしても、何故未然に防ぎ得なかったのだろうか。彼らは手を拱いていたのだろうか。部外者たる我等には窺い知れないが、何とも残念である。それとも全て承知で、行き着くところまで行かせて一挙に改革せんと謀ったのか？

④ 政治の不毛！

野党や自民党離党者或いは現執行部に対し腹に一物ある者達が、“得たり”というか“千載一遇の機会到来”とばかりに、小躍りして、小泉、武部、竹中ラインを攻撃している。何とも醜いものだ。だからといって、首相以下を擁護する積りは毛頭ないが、攻める側も守る側ももっと政治家に相応しい議論をして欲しいものである。

政争している余裕はない筈だ。証券市場が国民の信頼を取り戻すために何を為すべきかを議論することこそ肝要ではないか。